

聞名仏教

第 162 号 毎月発行
(発行日) 2024 年 3 月 1 日
発行所: 真宗大谷派念佛寺
〒 663-8113 西宮市甲子園
口 2 丁目 7-20
JR 甲子園口駅下車歩 4 分
電話 (0798・63・4488)
(発行人) 土井紀明
<http://nenbutsuji.info/>
アドレス nenbutsuji6@gmail.com
ゆうちょ銀行(ドイノリアキ)
記号 17810 番号 7259431

《 聞法会ご案内 》

- 〈同朋の会〉
毎月 22 日 午後 2 時始
(8 月は休みます)
- 〈念仏座談会〉 8 月は休み
毎月 12 日 午後 3 時始
- 〈「聞名の会」法話・座談〉
毎月 6 日 午後 7 時始
- 〈真宗入門講座〉(副住職担当)
毎月 18 日 午後 6 時 30 分始

聞法者の鑑

佐々木蓮磨

よく世間で「医者の不養生、坊主の無信心」ということを申しますが、これはうがったことばだと思えます。どうも坊主は職業が「聞かせ屋」になって「聞き手」にはなり難いものがあります。したがって僧侶で求道聞法の人があるとすれば、それは希有の人と言ふべきでしょう。

とくに僧侶の中でも学識のある方になると、「聞かせ屋」から一步進んで「聞き手」になり易いものです。ところが、大谷派の先哲一蓮院秀存師のみは、一派の学頭でありながら終生聞法の態度を失わず、常に「聞き手」になり「裁かれ手」になられた名師でありました。

師は何か胸に不審が起きると先輩後輩の別なく、直ちに教えを受けに走られたと聞いております。師が最も信頼しておられた先輩は

香樹院師でありました。あの晩のこと、香樹院師の寮舎を訪ねて「私はお聖教に向えば明信仏智と喜ばれますが、自分の胸にかえると気持ちの悪いときがあります。これはどうか」とお尋ねになると、香樹院師は言下に「そんなことを人に聞いて歩く暇があつたら、内で念仏していらつしやい」と突き放されたのであります。すると一蓮院は「では不思議と信じて念仏するばかりですか」と再び伺われると、香樹院は、また冷たく「不思議と言えば、今日まで生きてきたことが、早や不思議ではないか」と突き放されたので、一蓮院は、もはや言うことがなくなつて、念仏もろとも引き下がられたと聞いております。

また一蓮院師に常随した同行の信次郎が、ある晩のこと「今夜は某寺にお説教があるから参りたいと思えます」と申し上げると、師は喜ばれて、「それはありがたいことである、どうぞよく聞いて帰って、この一蓮院にも聞かせてもらいたい」と申されました。やがて信次郎が帰ると、一蓮院は「今晩のお説教はどうであつたか」とお尋ねになつたので、信次郎が「今晩のお説教は、如来様がこの信次郎を助けると呼んで下さるお話でありました」と答えると、一蓮院は身を動かしてお喜びになり「信次郎や、よいところを聞いて帰つたぞ、今

後は、いかなる人の説教を聞いても、そこ一つを聞くのだぞ、他のことを聞いたら必ず迷うから」とお諭しになつたということでした。

また一蓮院の道友に大量という方がおられて、岡崎で同行を寄せては法談をしておられたところ、寄り来る同行は日ごとになつて、一時は盛んなものになつたそうです。そのことを聞かれた一蓮院は、法を聞くために人が集まるのは結構だが、大量師自身は「聞かせ屋」になられては残念だと案じられて、ある晩のこと、(京都に来ていた)大量師を訪ねて忠告をしようと思つたのですが、フト自分に

《念佛寺永代経法要》

四月二十二日(月)

午前十時始と午後二時始の二座

法話 住職

講題 「我が名を称えよ」

*どなたでも自由にお越し下さい。

対話編 『浄土真宗』

8

立ちかえり、「聞かせ屋は」大量師ではなくて、私自身であったと気づき、一言も忠告せずに、念仏もろとも帰られたということでありませぬ。

幕末、異安心問題で講者達を悩ましたのは能登の頓成とんとでありました。一蓮院も、その渦中に巻き込まれて随分苦勞されたようでありましたが、晩年、人に語って「私も一時は頓成のために苦しめられたと思いましたが、今から考えてみると、頓成のお陰で開山聖人の他力回向ということを明らかにさせてもらいました。頓成は私にとっては大善知識であつたと感謝しております」と述懐されたそうです。

香樹院も「同学の講者は沢山いるが、出離の大事について相談のできるのは一蓮院一人である」と述懐された、と聞いております。師は常に蓮を愛し、みずから一蓮院という院号をつけられたようですが、いかにも蓮の如き濁りに染まぬ名師でありました。(了)

B 「前は、アミダ仏と人(物)の関係を寿命無量・光明無量のアミダ仏の基本的な本質からお聞きしました。今一度大事な点を述べてください」

A 「アミダ仏は寿命無量であり、人は有限な一つの物に過ぎませんが、人はアミダ仏のいのちの一つなのです。しかもアミダ仏は救い主であつて人は救われ手です」

B 「アミダ仏に救われるということはどういうことですか」

A 「私たちはアミダ仏によって生かされ、アミダ仏に支えられ、アミダ仏に離れない、アミダ仏の一つであるにも関わらず、その一番大事なことに無知(無明)であつて、私は私だけで存在しており、自分があたかも世の中と人生の主人公であるかのように思っているのです。それゆえその根本的な無知からさまざまな歪みや苦しみや悪が起こって

くるのです。そういうあるべからざる状態に陥っている人を、アミダ仏が私たちのいのちの親であり、主体であり、アミダ仏が私たちの支えであることに気がつかせてくださることを(アミダ仏に救われる)というのです」

B 「要するにアミダ仏から離れてしまつてまつたく不安定な状態、苦しい状態に陥っている私に、アミダ仏が私たちに、アミダ仏と離れない身であることを知らせ、アミダ仏に携め取られている幸せを与えてくださるのですね」

A 「そういうことですね。だけれどもアミダ仏のおんいのちを離れて存在している人は一人もありません。その人が善人であろうと悪人であろうと、賢い人であろうと愚かな人であろうと、男であろうと女であろうと、どの国のどんな民族の人であろうと、人であるということはアミダ仏において存在しているのですから、

みんな平等なアミダのいのちを生きているのです。ただそれほど密接で離しがたい恵まれた関係に置かれていることに気がついていないか、か、違いがあるので。気がつくことを覚るとか信心とかいうのです」

B 「そうすると、まず私がここに居て、そしてその外に私でないアミダ仏がましまして、そのアミダ仏が私たちを救いに来て下さるということではないのですね」

A 「ええ、とかく私たちは、アミダ仏を離れて存在しているような(私)をまず立てていますが、そういう私はまったく存在根拠のない空虚なXですね。いわばそれは単なる自我です」

B 「そういう私が、アミダ仏を信じたら、アミダ仏が私に結びついて下さるということではなく、初めからアミダ仏と私は結びつけられているに

もかわらず、その事に無知で、いつまでも小さな自分だけがみついて、その自分を他の人よりも、高みにあげようとし、持ち物を豊かにしよう、負けまいと頑張つて、焦り、イライラしているのでしょね」

A 「ええ、アミダ仏を見失つていると根本的に不安定ですから、なんとか安定したいと思ひ、財産や能力や人間関係や権力や地位などに必要以上に寄りかかり執着し、それによつて自分を満足させよう安定させようとあせつて居るのですね。しかしそこには本当の安定も安らぎもありませんから、いつまでもビクビクして孤独で、基本的にいのちが空虚になつてしまふのですね。それが我ら凡夫の姿なのでね」

B 「逆に云うと、私たちは心の底ではどこまでも安定したいし充実したいと願つて居るのですが、そうはなかなか出来ないまま人生が終わつて居るのが実情ですね」

A 「そうなんです。ここからがまた大事なことなのですが、本当の安定や充実を心の奥底

では願っていないがらどうにもならないでいる私たちを、かわいそうである、アマダ仏にあわせて安定させてやろう、救おうとはたらいてくださる

アマダ仏の大悲のはたらきがあるのですよと教え、知らせて下さったのが仏陀釈尊なのです」

B 「仏陀はどこにそれを示してくださっているのですか」

A 「仏説無量寿経という仏陀が説かれてた經典にです」

B 「ではその仏説無量寿経にはどのようにアマダ仏のはたらきとアマダ仏に救われねばならない人間が説かれているのですか」

A 「それをこれからお話ししますが、今言いましたように、まずアマダ仏と人の根本的な関係真理があり、それが私たちの支えであり、私たちの基盤であり、恵みであり、幸せの元になっています。その真理を親鸞聖人は〈撰取不捨の真理〉と仰せられています。その有り難い真理を私たち迷いの深い凡夫に知らせようと、仏陀釈尊は物語的にその恵みを仏説無量寿経として説かれ

ました。それが法蔵菩薩の願行とその成就のお話です」

B 「なぜ物語的に説かれるのですか」

A 「物語でなく論理的な道理だけだと、その真理は人の心になかなか沁み通っていきません。アマダ仏のはたらきは大悲のはたらきですから、論理だけでは人の心に入りにくいのです」

B 「たとえばどういう話ですか」

A 「ごく卑近ひきんで世間的な話でいいですよ、小さな子供に悪いことをしてはいけない善いことをしなさいと教えるときに、そういう観念を聞かすよりも、花咲かじいさんの話をすると子供にもよく分かります。また人生は享樂的なことばかりを求めて生きると虚しい人生になりますよと教える時に、浦島太郎の話をして聞かせるように」

B 「浦島太郎の話はそういう話なのですか」

A 「ええ、そういわれていま

B 「どんな意味ですか」

A 「私の記憶もだいぶ薄れていますが、むしろ貴方の方が

知っているように、むかしむかし、ある若い男が海岸で、亀が子供にいじめられているのを見て助けてやるのですね。

そしたら後日、美しい天人のような女性が恩返しに現れて、助けてくれた男を大きな亀に乗せ竜宮城へ連れて行ってくれる。そこは非常に快適なところで、豪華な宮殿（竜宮城）の中で歌や踊り、それに美味しい食事、きれいな姉ちゃん

がお酒で接待してくれて、居心地がいいのでそこで何年も過ごすのですね。やがてその男、故郷が恋しくなつて自分の家に帰る時に、その美しい女性が別れを惜しんで玉手箱を土産にもつて帰らせるので

すね。その男、元の浜辺に一人で帰ってきて、もらった玉手箱を開けると中から白い煙が出て、あつという間にその男がよぼよぼの老人になったという話でしたと、うる憶えに覚えています」

B 「この話が何か大事なことを教えているのですか」

A 「ええ、人生はただ享樂なものばかりを求めていると、

歳を取るのも忘れて楽しいよ

うだけれども、そういう娯樂、

快樂、享樂、道樂ばかりを追いかけての人生は、あつというまに過ぎ去つて、虚しく人生を送つてしまい、老いぼれた老人になつてしまった自分の姿を見て、空虚な悲哀感のみが残るといふ物語ですね。

いったい私の人生は何をしてきたのかという空しさが残る。せつかく人に生まれたのだから、そういう快適さばかりを求めたのではなく、空しくならない本来に充実し、真実に

ふれた人生を生きよと暗示している物語なのだ先輩からお聞きしました。そういう意味で浦島太郎の物語は身に沁みるものがあります」

B 「人はそういう日本の昔話とかイソップ物語とかアンデルセンの童話とか、そういう説話によつて、道徳観念や人生観が育てられてきたのですね」

A 「ええそうですね。ただ、神話や説話はそういう個人的な意味だけではありません。各国に伝わる神話が人間の歴史をも動かしてきた要因の一つなのですね。神話は大きな影響を歴史の上に与えてきま

した。ギリシャ神話、インドの神話、ユダヤ民族の神話、日本の古事記など、世界には沢山の神話や物語があります。

ただ悪くすると、そういう神話が権力者に利用されて国民をあらぬ方向へと陥らせる危険もあるのです。今も世界を動かす一つの要因になつてい

ますので、これは大事に慎重に扱わないといけないのですね。神話は適切に扱わないと逆に人間をあらぬ方向へ熱狂させる要素ともなり得ます」

B 「それはどのような場合ですか」

A 「たとえば、戦前の日本の教育で語られてきたように天皇は現人神として崇拜の対象になり、それを否定的に見る論説は弾圧され、現人神なる天皇のために命をささげて戦うという大義名分にもなり、理不尽な戦争を遂行する要因にもなりました。天皇を神の子孫というのは、記紀神話（古事記・日本書紀）が基になつているからです。神話を神話と冷静に見ず、実際の歴史的な事実のように宣伝されるとそれに振り回され、しばしば危険です」

B 「そうですね、逆に、説話や物語には大変尊いものもあるのですね」

A 「ええあります。神話学者で世界的に著名なジョセフ・キャンベル博士は優れた神話は真理に準じる真理だといひ、たとえばインドの仏教で説かれた大乘の菩薩の物語などをあげています。これはレベルの高い尊い神話（説話）だといっています。こうしたジャーナルカ物語のような菩薩の物語の中で非常に質の高い、尊い説話があり、それは人間を救い続けるような物語でもあるのです。『華嚴経』の善財童子の物語とか法蔵菩薩の物語などです」

B 「なぜ法蔵菩薩の物語は質が高く、尊いのですか」

A 「それは永遠の真理がそこに投影されているからで、この物語は真理を悟った覚者が語りうるような説話ですから、仏説とされ、仏説無量寿経のなかでも語られているのです。この中の法蔵菩薩の物語は真理そのものを極めてよく表現された説話といわれています」

B 「私は昔、法蔵菩薩の話を聞いたとき、法蔵菩薩は歴史上に現れた実在の菩薩だと思っていました。昔々、ある王様がインドにいて、世自在王仏の説法を聞いて出家して、法蔵比丘となり、一切衆生を助けたいと願って長い修行し、アマダ仏と成られて今もはたらき続けていると、そう単純に聞いていました」

A 「もし法蔵菩薩が歴史上のお方であるとすると、確かに尊い出来事であっても、これを実際の歴史的な事実として信じることは困難ですし、もしそれを強要するなら人に逆に不信感をいだかせます」

B 「なぜですか」

A 「一例ですが、法蔵菩薩は一切衆生をどうしたら救うことが出来るかを（五劫思惟）したといわれますが、五劫という時間は考えられないほどの時間ですし、為された修行も永劫の修行といわれます。大体、一劫の長さはよく譬えられるのは、四〇里四方の大きな岩石があつて、そこに一〇〇年に一度天から天女が降りてきて、薄い衣でその岩石をなでる、そうすると極めて

僅かですがすり減ります。それが全部すり減るのに要する時間が一劫などと譬えられませんが、考えられないほどの時間です。そういう長い間思惟したという法蔵菩薩が単なる歴史上の人としての菩薩とは考えられません。ですからこの話を歴史的な出来事と受け取ることはまず無理です」

B 「法蔵菩薩の発願・思惟・四十八願・永劫の修行とその成就が法蔵菩薩の物語の内容とお聞きしていますが、それをどう受け取ればいいのですか」

A 「それは、私たちにはたつきかけてくださっているアマダ仏の慈悲が如何に深く広く大いなるはたらきでありお心であるかと云うことを、迷える凡夫に知らせるための物語が法蔵菩薩の願行の説話だといえましよう。この物語を聞くことによつて、アマダ仏は私たちを深く憐れみ、私たちを本当の幸せにしてやりたいというアマダ仏の大慈大悲の深甚なることを感じさせられます。物語だからこそ、そこに溢れているアマダ仏の大慈悲のまことに胸をうたれるの

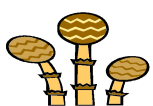
であり、やがて私たちの信心として発起する縁になるのです」

B 「その法蔵菩薩の願行の結果が南無阿弥陀仏と説かれていっているのですね」

A 「ええそれですから、この法蔵菩薩の物語から感じられるアマダ仏の広大な憐れみは、今ここに南無阿弥陀仏のお念仏の一声一声にはたらいっていることを教えられ、お念仏の有り難さが知らされるのです。法蔵菩薩の物語の内容はほかではありません、今称え出て下さる一声の南無阿弥陀仏の広大な憐れみそのものなのです」

B 「そうですね。それほどの大悲のかけられている私たちがであり、それが今のお念仏の姿なのですね。ナンマンダブツ・ナンマンダブツ」

(了)



【住職雑感】

高校の同期生から同窓会の案内が来た。四年ごとに同窓会をする約束になっていたが、コロナ禍の関係で二年ほど延び延びになっていたが、コロナもようやく収まる気配になったのであるう、今回は最後の同窓会になるというので、出席のハガキを出した。五年以上も会っていないので、お互い老化はかなり進んでいて姿もだいぶ変わってきたと思うが、今回は「会うはそのままお別れ」の会になると思う。この世の思い出になろうと思ひ出席を決めたのである。高校時代は悩みが大きくて、殆ど友達もいない孤独な学生だったが、今の年齢になって逆に人間関係が多くなったのは不思議である。そして五〇〇人ほどいた同期の者も現在2割近くはすでにこの世を後にしたと思う。そんな中で今まで生きてきたのも不思議である。この世に残るのが良いのか、先にこの世の生を終わるのが良いのかは分からないし分かる必要もないが、歳を重ねていくことによつて今まで感じなかった有り難さや不思議さを感じさせていたたいたのは妙味のあるものである。老化は身体の上では特に顕著である。起ち上がる時、頻尿、それに時々起こるこむら返りなどに老化をことに実感する毎日である。